

**Nathaniel Hawthorne's *The Whole History of Grandfather's Chair* and Sympathy for Others**  
(ナサニエル・ホーソーン『おじいさんの椅子の全歴史』における他者への共感)

Misa Ono\*

**SUMMARY:** This paper examines *The Whole History of Grandfather's Chair*, a series of sketches of colonial American life that Nathaniel Hawthorne wrote for children, within the context of mid-nineteenth century sentimentalism. Grandfather, the narrator of the sketches, relates the experiences of the victims and losers in American progress as well as the achievements of colonial governors and military leaders and expects his four grandchildren to understand another person's sufferings. The sketches play a role in developing the children's ability to sympathize with others. However, Grandfather does not attempt to draw sympathy when he mentions Anne Hutchinson, who deviated from contemporary gender norms, and racial others such as African Americans and Native Americans. This paper has revealed that in *The Whole History of Grandfather's Chair* others are excluded from forging emotional bonds and that it functions as a textbook to teach "proper" sentiments to white middle-class readers.

---

\* 大野 美砂 Associate Professor, Tokyo University of Marine Science and Technology, Tokyo, Japan.

## I. はじめに

『おじいさんの椅子の全歴史』(1841年)<sup>1</sup>は、ナサニエル・ホーソーンが子どものために書いた歴史物語である。イングランドのリンカーン伯の屋敷で使われていたオーク製の椅子が、娘のアーベラに結婚のお祝いとして贈られ、1630年に彼女が夫とともに新大陸に渡ったときに椅子もアメリカに移動するところから作品が始まる。彼女の死後、椅子は植民地時代や独立革命期の様々な重要人物の所有物になり、19世紀はじめには、語り手であるおじいさんがオークションでそれを入力し、4人の孫に椅子が目撃した出来事について話をする。椅子の経験が語られることで、子どもたちは植民地時代の初期から独立革命までのアメリカの歴史を知ることになる。

しかし、『おじいさんの椅子の全歴史』で紹介されるアメリカの歴史は、一般的なアメリカ史の記述と違う。作品の最初でおじいさんは、子どもたちが「学校の教科書では読んだことがないような、アメリカの歴史や有名な人たちについてのお話」を聞くことになると言う(11)。<sup>2</sup>そしておじいさんは、ニューイングランドに到着して一か月後に死亡し、植民地の進展には何の役割も果たさなかったレディー・アーベラという女性の話をする。アメリカ史に及ぼした影響を考えれば、多くのページを割いてもよいはずのジョン・ウィンスロップについては、簡単な言及しかない。その後、植民地時代の総督や戦争で功績を残した人物などとともに、ロジャー・ウィリアムズ、アン・ハッチンソン、インディアン、クエーカー教徒、フランス系アカディア人、独立革命期のイギリス王党派など、アメリカの発展の犠牲者や敗北者の経験が描かれる。<sup>3</sup>話の中には他者の苦しみに対する共感を引き起こすような描写が多数あり、おじいさんはその都度子どもたちに他者の気持ちを想像するよう求め、子どもたちが応答する。

クリスティン・ブドローやエリザベス・バーンズなどの研究が明らかにしているように、建国期からアンテベラム期のアメリカでは、他者の感情に対する感受性が共和国の市民の美德として、アメリカ人のアイデンティティを構成する重要な要素となった。アメリカの建国者たちが新しい国家の社会的・政治的構造を支える基盤をつくらうとしようとき、社会を安定させるための手段として共感や同胞の意識といった人間の感情を利用するという、アダム・スミスやデーヴィッド・ヒュームなどのヨーロッパの道徳哲学の理論に着目した。自由な社会で、個人の自律を尊重しながらも社会の安定を保障するメカニズムを

構築するために、他者の問題や他者の状況に対する個人の「自然な」反応を社会的にコントロールする必要があった。そのとき、個人の私的な想像力から生じる共感に働きかけることは、ブドローが言うように「近代社会に適した理想的な統治の形態」だったのだ (Boudreau 7)。18世紀末から19世紀前半に大量に出版された感傷小説や雑誌は、アメリカの読者に共感のあり方を教える役割を果たした。<sup>4</sup> 共感が共和国の市民がもつべき美德の重要要素になっていったなかで、『おじいさんの椅子の全歴史』は、子どもたちの共感する力を鍛えるテキストになっている。作家としての成功を強く望んでいた1840年前後のホーソーンは、「適切な」共感のあり方を伝えるという国家的な要請と、それを引き受けて成功していた感傷小説の方法を意識的に取り入れて、『おじいさんの椅子の全歴史』を書いているのではないだろうか。<sup>5</sup>

本論では、子どもに他者への共感のあり方を教えることを目的に書かれたテキストとして、『おじいさんの椅子の全歴史』を読んでみたい。また、そうすることで、この作品が白人中産階級のジェンダーや人種のアイデンティティ構築とどのように絡んでいるのかを明らかにしたい。次のセクションではまず、語り手であるおじいさんが子どもたちに伝える話が、19世紀アメリカの中産階級が理想とした教育の実践になっていることを確認する。その後、作品で取り上げられるアメリカの発展の犠牲者や敗北者の中でも、おじいさんが共感を向けるべき対象として描いているレディー・アーベラやアーカディアのフランス系住民とともに、アン・ハッチンソンのようなジェンダーの規範から逸脱した女性や、インディアン、黒人奴隷といった、ホーソーンやこの作品の読者層を形成した白人中産階級にとっての人種的な他者の描写と、それに対する子どもたちの反応を分析する。

## II. おじいさんの教育

ナンシー・コットやメアリー・ライアンなど、アメリカ北東部の中産階級を研究する歴史家は、1830年代から50年代に白人中産階級の考え方が変化し、家庭や家族に大きな価値が置かれるようになったことに注目している。ライアンが「母の帝国」と呼んだ家庭が、国家や政治といった公的な領域とは離れた私的な領域だと考えられる一方で、共和国の将来を担う子どもたちを育てる場として政治的な役割をもった。領域の分離に基づく家庭とそこで教えられる感受性が、中産

階級に相応しい倫理観を継承していくために重要な意味をもった。また、カルヴァン主義では「墮落」した存在と認識されていた子どもが、ロマン主義的な考え方が主流になると無垢な存在と見做されるようになった。すると感情面での教育が家庭内での母親の仕事になり、リチャード・ブロードヘッドが「愛情による躾 (disciplinary intimacy)」(Brodhead 40) と呼ぶような、家族の絆の中でやさしく教え伝える方法が求められるようになった。<sup>6</sup>

『おじいさんの椅子の全歴史』で、子どもたちは家庭を中心にした新しい形の教育を受ける。ここでは母親ではないが、公的な場からは引退したであろうおじいさんが、家庭内の暖炉のそばで、あたたかい雰囲気の中で話をする。<sup>7</sup>おじいさんは「昔の話をしようと用意していたが、子どもたちがそれを義務ではなく楽しみだと思えるように、話をしてくれと頼まれるまで待つと決めていた」(146)。子どもたちはみな椅子の話が好きで、「他に予定がないときには、椅子のまわりを集まるようになった」(51)。2、3世紀前にイギリスで作られた椅子がアメリカに運ばれ、アメリカ史の様々な場面の目撃者になったという仕掛けのために、子どもたちは歴史の話を身近なものに感じることができる。また、椅子の背もたれについているライオンの頭も、子どもたちがおじいさんの話を楽しく学ぶのに大きな役割を果たしている。ライオンからは「唸り声が聞こえてきそう」で(10)、最も幼いアリスには、「ライオンの頭が自分に向かってうなずき、大きな顎を開けてお話をしそう」に見える(147)。

作品の冒頭では、歴史上の人物の話をするときに、家庭での私的な側面に焦点を当てることを強調する。

すでにこの世を去った人たちの影のような輪郭に生命の色合いを与えるのに、彼らのイメージを炉辺の椅子という実在する家庭の現実結びつける以上に効果的な方法はない。そうすることで私たちは、これらの歴史上の人物が私的でなじみやすく、外面的な行動を並べた冷たい枠組みの中には入り切らない存在だと感じる。(5-6)

おじいさんの話は、しばしば歴史上の人物の家庭内での私的な場面に注目する。例えば、18世紀はじめに天然痘がボストンを襲ったときのコットン・マザーの試みは、マザーの息子に対する愛情の話になる。トマス・ハッチンソンの家が印紙条例に反対する暴徒に焼かれる

場面では、父親の安全を心配して世話をする娘とともに家庭の中にいるハッチンソンの姿が描かれる。椅子は、多くの歴史上の人物の家庭で使われたので、おじいさんの語りが家庭の空間に入っていくための手段になる。

4人の子どもたちは年齢、性別、性格が違い、おじいさんの話に違う反応をする。最年長のローレンスは12歳で知的好奇心が強く、政治や歴史上の出来事に関心をもっている。想像力が豊かで、「ときに、特に黄昏時に、まる一時間椅子を見つめ、想像力によって昔椅子に座った人たちを再び呼び寄せる」(31)。おじいさんの話に対して常に洞察力に富んだ意見を述べ、歴史上の人物が経験した苦しみに深い共感を寄せる。一方で、政治よりも家庭のことに興味のある10歳のクララは、周囲の人たちを気かけ、妹のアリスが泣き出すと慰める。修道女の姿をした人形のためにビーズのロザリオを作っているが、人形はバンカーヒルでの祝祭に参加し、記念塔建設を手伝うことになっている(20)。クララはバーバラ・ウェルターが「真の女性」と呼んだ、家庭的で敬虔、従順な女性になるように育てられているのである。<sup>8</sup>また「豪胆で活発、落ち着きのない」(11)9歳のチャーリーは、おじいさんの話の中でも戦争や冒険ばかりに興味を示し、他者の苦しみに共感することはない。ケン・パレルによると、アンテベラム期の子どもの教育に関する著作は、しばしば少年を感情面で教育することの難しさを強調した。少女と違って、少年には家庭での愛情を通した教育の効果が及びにくいと考えられていた(Parille 30-34)。おじいさんもチャーリーの教育には苦勞し、彼に話をする価値があるのかと思うこともある(21)が、常にやさしい言葉で彼の考えを修正しようとする。<sup>9</sup>最年少で「天上の性質をもつ」(170)と言われる5歳のアリスはよく泣き、出来事の複雑な背景は理解できなくても、おじいさんの話にしばしば共感の涙を流す。このような家庭において、おじいさんは苦悩する他者の経験を子どもたちに語る。そして作品の読者である子どもたちは、おじいさんの話とそれに対する4人の子どもそれぞれの反応から、性別や年齢に「相応しい」他者への感情のあり方を学ぶことになる。

### III. 子どもたちの共感、レディー・アーベラ、アン・ハッチンソン

おじいさんによるレディー・アーベラの話では、「やさしく甘い表情をした」アーベラは、「粗野で屈強な」他の植民者とは対照的な人

物として描かれる。アメリカに向かう船の中で、「あまりにも青白く、弱々しいので、ウィルダネスの困難に耐えられそうには見えない」アーベラは、新大陸で生き延びることなく死んでしまう。一方で植民地の他の住民はみな「粗末な小屋」に住み、家づくりから食料の調達まで生きるためにあらゆる仕事をしている (15-16)。アーベラは17世紀のアメリカでは生き残れなかったが、19世紀の理想の女性像と一致する。フランシス・コーガンが言うように、19世紀のアメリカでは、身体の力が強く、活力のある健康的な女性は女性的ではないと思われ、青白く、病弱な女性が理想とされた (Cogan 29)。

初期植民地でのアーベラの経験に、アリス、クララ、ローレンスはそれぞれ大いに共感する。アリスは「青い目を大きく開け、真剣におじいさんの顔を」見つめ、目には「繊細な青い花についた滴のような涙」が溜まっている (18)。おじいさんが取り上げた歴史上の人物の中でも、彼女は特にアーベラから強い影響を受けたようで、ある日、おじいさんの留守中、「レディー・アーベラが椅子に座っているかのように、アリスがやさしいアーベラと話している声」が聞こえる (31)。クララは、アーベラの死後夫のアイザック・ジョンソンがどうしたのかを心配し、妻の死後一か月経たないうちに死亡したというおじいさんの返答に深い悲しみを表す (19)。ローレンスは「彼らがここに墓地をつくる必要がなかったとしたら、数年のうちにイギリスに戻ってしまったかもしれないね」と、思慮深い発言をする (19)。チャーリーだけは、アーベラの話が始まると同時に「おじいさんの杖にまたがり、けたたましい音をたててギャロップをしながらその場を離れていき、そのまま戻ってこない」。おじいさんはチャーリーに、「そんなに大きい子が杖に乗るなんて、恥ずかしいと思わないといけないよ」とやさしく注意する (18)。

椅子はアーベラの死後、ロジャー・ウィリアムズの持ち物になり、彼が追放されたときにアン・ハッチンソンに譲られる。おじいさんはハッチンソンについて、「機知に富む、高い教育を受けた女性」で、「自分の聡明さや才能を自覚していたので、社会がそれを役立てないのは残念だと思ひ」、週に1、2回ボストンでレクチャーをしたと紹介を始める。そして「女性が宗教的教義について公の場で人々に話をすることは危険で適切ではない」というボストンの牧師たちの考えから、彼女が追放されるに至った経緯を説明する (27-28)。しかしおじいさんは、ハッチンソンについては、アーベラのとくのように子どもたちから共感を引き出そうとはしないし、子どもたちが強い反応を見せるこ

ともない。特に椅子が好きなクララが、ハッチンソンも椅子に座ったのかと質問をし、チャーリーが的外れな感想を言うだけで、一貫して歴史上の人物や出来事に知的な関心を示し、深い洞察力のある意見を述べるローレンスが、ハッチンソンの話では何も発言しない。アリスが「かわいそうな女性を森に追いやったの？」と聞くと、おじいさんは「彼女の人生の終わりはとても悲しいものだった」と言うだけで、「そんな話を聞いてはいけないよ」と、次の椅子の所有者ヘンリー・ヴェーンに話題を変えてしまう (28)。ブドローによると、ヨーロッパの道徳哲学者や建国期以来のアメリカの政治家は、個人の間で共感に満ちた交流は社会の安定を保障するものになるが、共感が間違った方向に向かうと社会の秩序が乱れる原因になると考え、共感に値しない者へ「不適切な」感情をもつことを警戒した (Boudreau 10, 23-24)。『おじいさんの椅子の全歴史』で、17世紀においても19世紀においてもジェンダーの規範から逸脱する活動をしたアン・ハッチンソンは、子どもたちが共感を寄せるべき対象ではないのである。

#### IV. 家族の離散、アーカディア人の悲劇、奴隷制度

フィリップ・フィッシャーによれば、センチメンタル小説において家族の離散は、登場人物に対する読者の共感を誘うのに最もよく使われる題材である。フィッシャーは『アンクル・トムの小屋』を例に議論を進め、奴隷のような、読者とはまったく違う状況におかれた登場人物と読者の間に共通の感情を喚起しようとするとき、ストウは読者が自分の家族に対してもつ感情を利用しているという。ストウの小説の19世紀の読者は、自分の家族が突然遠くのプランテーションに売られていくという経験をしたことはないだろうが、その多くは突然の死別を経験したことがあるので、家族との別れの描写は読者が登場人物の内面に入っていく方法となる (Fisher 118-19)。

『おじいさんの椅子の全歴史』第2部で、おじいさんはフレンチ・インディアン戦争中の1755年に、イギリスによって強制移住させられたフランス系アーカディア人の話をする。デレク・パチェコが「極端なまでに感傷的な」場面だという (Pacheco 192) アーカディア人追放の話は、家族が離散する悲劇として描かれている。おじいさんは、故郷を追われたアーカディア人の一部がボストンの港に上陸した時の様子を次のように語る。

哀れな妻が夫を呼んでいる声が聞こえたかもしれない。ああ、夫は行ってしまった。妻は夫がどこに行ったか知らなかった。もしかしたらアーカディアの森に逃げ、灰になった彼らの家に戻って泣いていたかもしれない。年とった未亡人が苛立ちの混ざった悲しげな声で自分の息子の名前を呼んでいた。彼女は息子の愛情のこもった献身のおかげで、長年生きてきたのだ。彼は追放された者の集団の中にはいなかった。(中略) ことによると、アリスにそっくりの5歳の金髪の女の子が一人になり、母親を探して泣き叫び、彼女に親切な言葉をかけてくれる人を見つけられずにいたかもしれない。(125-26)

波止場にいるアーカディア人の周りに集まったニューイングランドの人たちの中で、彼らに最初に共感を示すのは家庭のある女性たちである。ニューイングランドの人たちは、アーカディア人の「フランス語の奇怪な音」に当惑するが、その中でまず、「すべてが整っていて快適で、夜になれば夫や子どもが近くにいる、あたたかくて安全な家庭」から出てきたばかりの女性たちが、「アーカディアの不幸な妻や母たちに哀れみを」示す。その後すぐに、「最初は踊ったり跳ねまわったりしていた」ボストンの子どもたちが影響を受け、共感の涙を流す。やがて「人間が人間に対して感じる兄弟の絆」で、ニューイングランドの人みながアーカディア人の苦悩を理解するようになる(126-27)。

ローレンスはアーカディア人の悲劇の話に「感極まって震える声」で、「非情な戦争がこれほど耐え難く残酷なことをした例があるだろうか」と言う。アリスはずっと目に涙を浮かべていたが、おじいさんが話を中断すると、むせび泣きをする。クララは「これほど悲しいことはなかったでしょう」と目を潤ませる。チャーリーは、故郷のために戦わなかったアーカディア人が悪いという発言をするが、おじいさんはそれに対して直接返事することはせず、アーカディア人が経験した苦難の話をつづける(128-29)。おじいさんはまた、アーカディア人の話の最後で、「私がアメリカの詩人だったら、詩の主題にアーカディアを選ぶだろう」と言う。さらに1851年版では、「おじいさんが最初にこの言葉を発してから、最も有名なアメリカの詩人がエヴァンジェリンの美しい詩で我々みなのおもいやりの涙を誘った」と、アーカディア人の追放により結婚式の日から夫から引き離された新婦を描いたロングフェローの1847年の物語詩『エヴァンジェリン』に言及する(129)。このようにして、おじいさんはアーカディア人の悲劇をア



メリカ人みなが共感を寄せるべき対象として提示する。<sup>10</sup>

しかし『おじいさんの椅子の全歴史』において、アメリカ史の中で家族の離散といえば必ず思い出されるはずの黒人奴隷の歴史は、共感の対象にはならない。おじいさんは、黒人たちの歴史を知らないわけではない。作品の第2部でクララがその頃アメリカに奴隷がいたのかという質問をすると、おじいさんは黒人だけでなく南米のインディアンやアイルランドから来た白人も奴隷にされたことに触れた後、「小さな黒人の赤ちゃんは、幼い子猫のように売られていったんだ」と言う。それに対してチャーリーが「アリスだったら、その人形の代わりに黒人の赤ちゃんと一緒に遊ぶのを喜んだかもしれないね」と笑いながら言うと、アリスは黒人の赤ちゃんよりも人形の方がよいというように、「蠟人形を胸にしっかり」抱きしめる(109)。おじいさんはその後、当時の女性たちが着ていた豪華なドレスに話題を変え、子どもたちは黒人の赤ちゃんが売られていく話にまったく心を動かされない。『おじいさんの椅子の全歴史』では、人種的アイデンティティによって共感の対象になるかどうかが変わり、黒人たちはアメリカ人を結ぶ共感の外に置かれている。

## V. ローレンスの涙、インディアン、ジョン・エリオット

『おじいさんの椅子の全歴史』第1部で最も多くのページが割かれているのが、インディアンの歴史と彼らをキリスト教に改宗させるために聖書を部族語に翻訳したジョン・エリオットの話である。おじいさんはまず、17世紀のアメリカにおけるインディアンと入植者の遭遇をインディアンへの共感を込めて説明する。インディアンの命を奪った伝染病の流行を白人たちがプロヴィデンスだと解釈したことについては、「なぜ神の目から見て、インディアンの命が白人の命よりも大切でないと思うのか私にはわからない」と、入植者たちの考え方を批判する。両者の武力衝突については、「戦えば成功したかもしれないときもしばしば服従」して友好的な関係を求めたインディアンと、「そうする明白な必要もないのに」彼らを殺害し、彼らの生活を奪った白人たちという構図を提示する(42-43)。

しかし、おじいさんによるインディアンの歴史の説明は、レネ・バーグランドが「文学におけるインディアン強制移住」と呼んだものである。バーグランドによれば、アメリカ文学の多くがインディアンに対

する暴力を嘆きながらも彼らの存続を否定し、もっぱら彼らを消滅した人たちだと描くことで、政治的な強制移住を補強した (Bergland 3)。『おじいさんの椅子の全歴史』では、インディアンへの苦悩は 17 世紀で終わる。おじいさんの語りは、初期植民地でのインディアンと入植者の対立を描いた後、インディアンへの悲劇から離れ、ジョン・エリオットの偉業の方に焦点を合わせていく。作品が書かれた 1840 年前後は、アメリカで先住民の強制移住が大きな政治的議論になっていたはずなのに、インディアンへの問題が 19 世紀まで続く問題として扱われることはない。

おじいさんは長い時間をかけて、自分自身が崇拜するジョン・エリオットの話をする。ジョシュア・ベリンは、19 世紀前半の多くの文学作品にエリオットが登場し、アメリカの形成における彼の貢献が神話化されていったことを明らかにしている。ベリンによると、彼の宣教活動は様々な形で先住民に対する抑圧を正当化するのに使われていた (Bellin 5-7)。『おじいさんの椅子の全歴史』は、19 世紀に行われたエリオットの再評価に貢献している。「他のすべての初期植民者がインディアンは劣った人種で、白人が求めるまでの間、神が彼らにこの美しい土地を所有させておいたに過ぎない」と考えていたときに、エリオットはインディアンへの「愛や信頼、希望」にあふれ、「生涯を彼らのために費やした」(43) 人物として称賛される。おじいさんによると、部族の言語は「他のすべての言語とまったく違い、これまでインディアン自身以外が学んだことはなく (中略)、文字によって表現することは不可能に見える奇妙な言葉」だが、エリオットは聖書が「野蛮な部族を文明化し洗練させる」助けとなると考え、自ら彼らの言葉を学び、「できるだけ多くのインディアンに怠惰で放浪する習性を断ち、イギリス人のように家を建て、畑を耕すように」説き、学校をつくり、読み方や祈り方を教えたのだという (44-48)。話の最後の方で、おじいさんはローレンスに次のように言う。

兄弟のために公平無私な情熱を捧げることなどできるのかと  
思ってしまうことがあったら、使徒エリオットがどんな苦勞を  
したか思い出しなさい。自分の利益しか考えられないことがあ  
ったら、エリオットが書いたインディアンへの聖書のことを考えな  
さい。このような人がいて、このような生きて証を残したとい  
うのは世の中にとってよいことなんだ。(49)

この言葉を聞いて、ローレンスの目からは涙があふれ出てくる。常におじいさんの話を熱心に聞き、賢明な意見を述べながらも、泣くことはなかったローレンスが、この場面では大いに涙を流す。おじいさんは更にローレンスにコンバース・フランシスが書いた『ジョン・エリオット伝』を読むよう勧めるが、この伝記はエリオット神格化の流れの中で出版された伝記の代表としてベリンが言及しているものである(Bellin 5-10)。<sup>11</sup> このように、インディアンとジョン・エリオットの話では、おじいさんは植民地時代初期におけるインディアンの「消滅」については読者の共感を引き出そうとするが、その後はインディアンを「野生」の状態から救済し、「文明化」しようとしたエリオットの方に関心に向け、ローレンスがエリオットに共感の涙を流すところで話が終わる。19世紀にも続いていたインディアンたちの経験におじいさんの語りや子どもたちの共感が向けられることはない。

## VI. おわりに

『おじいさんの椅子の全歴史』は、アメリカの歴史上の様々な人物に関するおじいさんの話とそれに対する4人の子どもたちの応答を通して、読者の子どもたちが他者への共感のあり方を学ぶテキストになっている。おじいさんは、アメリカの発展の過程で生じた喪失に多くのページを割き、子どもたちに犠牲者や敗北者の経験を想像するよう促すが、アン・ハッチンソンのようなジェンダーの規範から逸脱した女性や、黒人やインディアンのような人種的な他者の話では、子どもたちの共感を引き出そうとすることはなく、子どもたちが共感の涙を流すこともない。この作品は、共感を向けるべき対象とそうではない人々を差異化し、他者への「適切な」感情のあり方を教えるテキストになっている。ホーソーンが白人中産階級の読者の子どもを想定して子ども向けの作品を書いたとき、『おじいさんの椅子の全歴史』には彼らの意識が反映されることになり、ホーソーン自身やホーソーン自身の作品の読者層を含む19世紀の白人中産階級の他者への共感の限界を示す作品となっているのである。

\*本稿は、2020年8月28日に開催された初期アメリカ学会第82回例会における口頭発表「ナサニエル・ホーソーンが書いた子どものためのアメリカ史——『おじいさんの椅子の全歴史』におけるジェンダーと人種の問題を中心に」の内容を論文にまとめたものである。

## Notes

1. オハイオ州立大学版ホーソン全集第6巻の解説には、『おじいさんの椅子の全歴史』出版の経緯が詳細に書かれている。1841年に『おじいさんの椅子』、『昔の有名な人たち』、『自由の木』という、内容が連続している別々の作品として出版された3冊が、1842年に『子どものための伝記物語』とともに1冊の本として再出版された。さらに1851年には、1841年出版の3冊が『おじいさんの椅子の全歴史』というタイトルの3部構成の一連の作品としてまとめられた形で、『歴史と伝記の本当にあった話』の中に収録された (Bowers 313)。
2. 『おじいさんの椅子の全歴史』からの引用にはオハイオ州立大学版を使用し、括弧内にページ数のみを記載した。
3. ジリアン・ブラウンによると、『おじいさんの椅子の全歴史』が出版された頃のアメリカの教科書や一般的な子ども向けの歴史書では、アメリカの歴史はコロンブスの西インド諸島発見とそれに続く北米植民地建設から始まり、これらの探検や移住のための航海を国家形成の中心的瞬間として記念し、その後3世紀にわたる様々な人の様々な経験は、アメリカ合衆国形成に至る一連の出来事として単純化された (123)。
4. ヨーロッパの道徳哲学、建国期からアンテベラム期のアメリカで共感のもつ意味、共感の形成において感傷小説や雑誌が果たした役割については、Boudreau 1-82, Barnes 1-39, De Jong 1-12を参照。
5. ホーソンは子ども向けの作品を自分の評価を高める手段のひとつと考え、執筆に取り組んでいたように思われる。ホーソンは、1835年にクリスマス用のギフトブックに掲載した小品「アニーちゃんのお散歩」から、『ピーター・パーリーの家族で読む地域別万国史』(1837年)の編集、『おじいさんの椅子の全歴史』(1841年)、『子どものための伝記物語』(1842年)、『ワンダー・ブック』(1852年)や『タングルウッド・テイルズ』(1853年)のような古典神話の語り直しまで、多くの子どもを対象にした作品を書いている。これらの作品を書いた時期は、匿名で地域の雑誌に短編小説を出版していた1830年代から、『緋文字』(1850年)で文学作家としての名声を確立し、『七破風の家』(1851年)、『プライズデイル・ロマンス』(1852年)と次々長編小説を発表する1850年代前半に至る、作家としてのキャリアの中で非常に重要な時期でもある。また、これらの作品の内容は歴史、地理、伝記、神話など多岐にわたり、エリザベス・グッドイナフによれば、ホーソンの子ども向けの作品には、アンテベラム期に急速に需要が高まっていた児童文学の分野で、子どもに教えたいと考えられていたあらゆる内容が含まれている (Goodenough 27)。ホーソン自身が友人ロングフェローに宛てた手紙の中で書いているように、収入を得るために児童文学の執筆に向かったという側面もあるだろうが (Hawthorne, *The Letters, 1813-1843*, 252)、それだけではなく、作家としての成功を得るための重要な方法だったと思われる。ホーソンの児童文学作品は長い間ほとんど研究の対象とされなかったが、1990年代以降優れた研究が出ており、その中には例えばカレン・サンチェス＝エプラーの論考など、ホーソンがキャンオン作家として認められていく過程で児童文学作品が果たした役割の重要性を強調するものがいくつかある。なお、ホーソンの児童文学作品に関する研究の歴史については、Pacheco 188, 207-08注9を参照。
6. ホーソン自身が学校よりも家庭における教育を信奉していた (Herbert xix)。
7. 作品中に、おじいさんがホーソン自身と結びつけられる記述がある。作品の第1部でおじいさんは、ハーヴァード大学初代学長のヘンリー・ダンスターが椅子を所有した後、10年くらいの間椅子の所有者について矛盾や不明確な要素があると子どもたちに説明するが、その中で「そ

の頃、私と君たちの先祖であるウィリアム・ホーソーンが椅子を所有していたという説がある」と言い (32)、語り手のおじさんとホーソーン自身が重ねられる。アンテペラム期の文化の中で主に母親の仕事とされた家庭内での子どもの教育をおじさんが担い、そこにホーソーン自身のイメージが重ねられるというところは、男女の領域の分離の中でホーソーンの創作が置かれた複雑な状況、ホーソーンの創作とジェンダーの問題が考察できるところでもある。

8. ウェルターは、19世紀の女性の理想とされた「真の女性」の特質を敬虔、純潔、従順、家庭的であることとし、この基準で女性は自分自身を判断し、夫や隣人、社会から評価されたと論じている (152)。
9. アン・マクラウドによると、この時期の子どもの定義は厳密ではなかったが、子ども時代は12歳くらいで終わったようだ (14)。そうすると、12歳のローレンスは少年時代が終わる年齢だが、9歳のチャーリーは少年時代の真つただ中にいる。
10. 『おじさんの椅子の全歴史』におけるロングフェローの『エヴァンジェリン』への言及については、Pacheco 201を参照。またホーソーンは、戦争のような人間の悲劇の歴史を単純な言葉で語ることはできず、詩の言葉にして残すのがよいと考えていたようである。ホーソーンは晩年に南北戦争中の激戦地を訪問したときの紀行文「主として戦争問題について」(1862年)で、壮絶な戦争の風景は詩の言葉で記録し、後世に伝えていくしかないと書いている (Hawthorne, “Chiefly about War-Matters” 418-19)。
11. ホーソーンは『おじさんの椅子の全歴史』で、17世紀半ばのピューリタンによる最初の先住民への宣教活動において、ジョン・エリオットとともに大きな役割を果たしたトマス・メイヒューには触れていない。19世紀前半に大々的な再評価が行われたジョン・エリオットのみを子どもたちに紹介している。エリオットとメイヒューの宣教活動については、Hall 255-58 参照。

#### Works Cited

- Barnes, Elizabeth. *States of Sympathy: Seduction and Democracy in the American Novel*. Columbia UP, 1997.
- Bellin, Joshua David. “Apostle of Removal: John Eliot in the Nineteenth Century.” *The New England Quarterly*, vol. 69, no. 1, 1996, pp. 3-32.
- Bergland, Renée L. *The National Uncanny: Indian Ghosts and American Subjects*. Dartmouth College, 2000.
- Boudreau, Kristin. *Sympathy in American Literature: American Sentiments from Jefferson to the Jameses*. UP of Florida, 2002.
- Bowers, Fredson. Textual Introduction. *True Stories from History and Biography*, edited by William Charvat, et al., vol. 6, Ohio State UP, 1972, pp. 313-36.
- Brodhead, Richard. *Cultures of Letters: Scenes of Reading and Writing in Nineteenth-Century America*. U of Chicago P, 1993.
- Brown, Gillian. “Hawthorne’s American History.” Millington, pp. 121-42.
- Cogan, Frances. *All-American Girl: The Ideal of Real Womanhood in Mid-Nineteenth-Century America*. U of Georgia P, 1989.
- Cott, Nancy. *The Bonds of Womanhood: “Woman’s Sphere” in New England, 1780-1835*. Yale UP, 1977.
- De Jong, Mary G. Introduction. *Sentimentalism in Nineteenth-Century America: Literary and Cultural*

Nathaniel Hawthorne's *The Whole History of Grandfather's Chair* and Sympathy for Others

- Practices*, edited by Mary G. De Jong, Fairleigh Dickinson UP, 2013, pp. 1-12.
- Fisher, Philip. *Hard Facts: Setting and Form in the American Novel*. Oxford UP, 1987.
- Goodenough, Elizabeth. "Grandfather's Chair: Hawthorne's 'Deeper History' of New England." *The Lion and the Unicorn*, vol. 15, 1991, pp. 27-42.
- Hall, David D. "Forming Native American Congregations." *Puritans in the New World: A Critical Anthology*, edited by David D. Hall, Princeton UP, 2004, pp. 255-69.
- Hawthorne, Nathaniel. "Chiefly about War-Matters." *Miscellaneous Prose and Verse. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by Thomas Woodson, et al., vol. 23, Ohio State UP, 1994, pp. 403-42.
- . *The Letters, 1813-1843. The Centenary Edition*, vol. 15, Ohio State UP, 1984.
- . *The Whole History of Grandfather's Chair. True Stories from History and Biography. The Centenary Edition*, vol. 6, Ohio State UP, 1972, pp. 5-210.
- Herbert, T. Walter. *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family*. U of California P, 1993.
- MacLeod, Anne Scott. *A Moral Tale: Children's Fiction and American Culture, 1820-1860*. Archon, 1975.
- Millington, Richard H., editor. *The Cambridge Companion to Nathaniel Hawthorne*. Cambridge UP, 2004.
- Pacheco, Derek. "'Vanished Scenes . . . Pictured in the Air': Hawthorne, Indian Removal, and *The Whole History of Grandfather's Chair*." *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 36, no. 1, 2010, pp. 186-211.
- Parille, Ken. "'The Medicine of Sympathy': Mothers, Sons, and Affective Pedagogy in Antebellum America." *Sentimentalism in Nineteenth-Century America: Literary and Cultural Practices*, edited by Mary G. De Jong, Fairleigh Dickinson UP, 2013, pp. 29-45.
- Ryan, Mary P. *The Empire of the Mother: American Writing about Domesticity, 1830 to 1860*. Haworth P, 1982.
- Sánchez-Eppler, Karen. "Hawthorne and the Writing of Childhood." Millington, pp. 143-61.
- Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood, 1820-1860." *American Quarterly*, vol. 18, no. 2, part 1, 1966, pp. 151-74.